No.63
2015. 6. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■強く、しなやかに・・・折れない心を育てる …… 1
■ネパール大地震被災者支援を開始しました …… 2
■地球の木 国内スタディツアー2015 …… 3
■ラオス支援がめざすもの …… 4
■CWCC訪問―ある女の子の場合― …… 5
■「アン村の自然染色」これから …… 5
■「たうんチーム」の活動は …… 6
■「出前講座チーム」のこれから …… 6
■多文化共生に向けての取り組み …… 6
■支援地報告―5/30 地球の木総会―気仙沼、そしてネパール 7
■気仙沼だより その9 よってけ工房 …… 7
■代々木公園で初のカンボジアフェスティバル …… 7
■活動日誌 …… 7
■INFORMATION …… 8

強く、しなやかに…折れない心を育てる

逆境を乗りこえる力

昨年度から始まったカンボジアのプログラム「DV/レイプ被害者支援」には、「折れない心で立ち直る女性たちを応援」という副題をつけました。カンボジア女性緊急救済センター(CWCC)は、原則として、法に訴えることを決心した被害者を支援しています。「女性たちが自ら立ち直るのを助ける」ことが目標です。暴力を受けた女性たちにとっては、勇気のいることですが、泣き寝入りをしていては状況は改善されないからです。苦境に陥ってもそこから這い上がることのできる「折れない心」が必要とされます。

最近「レジリエンス」という言葉をよく耳にするようになりました。Resilience とは、弾力を意味する言葉で、回復力とか、立ち直る力という意味です。元は物理学で使われた言葉だそうですが、最近は子育て、防災、地域づくりなど様々な分野で使われています。ストレスや不幸なできごとにきちんと適応でき、立ち直ることができる能力は、現代社会でまさに必要とされている力なのでしょう。

災害を乗りこえる力

4月にネパールで大地震がありました。首都カトマンズや中部丘陵地帯での被害が大きく、支援地マンガルタール村周辺の村々も被災しました。すぐに情報収集を開始し、支援を決定しました。80年ぶりの巨大地震とその余震に、ネパールの人たちは恐怖におののいていたようです。しかし、すぐに住民同士の助け合いの様子がネットで流れました。家が壊れた人たちは、シートでテントを作り、そこに避難しました。高齢者や病人、子どもを優先して避難場所をあてがう様子も報告されています。

地震発生から2週間経ち、家を木材などで補強したり、仮設の小屋を建てたりしている地域もあります。しかし、雨季が迫っているため、感染症などの病気が心配です。テントや医療の支援が急務です。インフラが整っていないネパールでは、復興に長い時間がかかると思われます。今後も地域の絆、生きのびる力を発揮しながら復興を目指してほしいと思います。

持続可能な社会を創る力

国内スタディツアーで訪れた藤野トランジションタウンでも「レジリエンス」という言葉が使われています。トランジションタウンとは、地域の住民たちが自らの創造力をもって地域の底力(レジリエンス)を高めるための実践的な活動です。そのような暮らし方により、石油に依存する生活から脱却し、持続可能な社会を創っていくことができるという運動です。

地球の木もしなやかに

地球の木も刻々と変化する世界情勢に対し、しなやかに対応しながら活動していきたいと思います。ネパールの復興支援を多くの人に呼びかけ、被災者の声を聞きながらサポートしていきます。カンボジアの女性たちの折れない心にも寄り添っていきます。ラオスの村人たちの持続可能な暮らしへの支援を継続します。

2015年度は次の3ヵ年計画を策定する年とします。設立して24年を迎え、変化に対応した地球の木のあり方を考えていきます。地域での発信力を増し、たうん、幸せ分かち合いクラフト、出前講座などを通じて共感者を増やしていきたいと思います。力強く、しなやかに、皆の力を発揮して今年度も活動していきます。

(理事長　丸谷士都子)

「あーすフェスタかながわ」でネパール募金を呼びかける

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 会報作成チーム ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

ネパール大地震被災者支援を開始しました

地球の木は、4月25日にネパールで発生したマグニチュード7.8の巨大地震の被災者に対し、緊急及び復興のための支援を開始しました。

テントに避難（カルパチョーク村）

怖くて住めない！（マンガルタール村）

テント（防水シート）が届いた（マンガルタール村）

＊現地の状況

震源地は首都カトマンズ北西約80キロ。ネパール中部を中心に大きな被害が発生しました。その経済的、社会的影響は全土に及ぶと思われ、5月25日現在、ネパール国内の死者は8,600人を超えました。多くの家屋や世界遺産の寺院などが倒壊しました。余震が頻発する中、被災した人々は戸外のテントで暮らしています。

雨季が始まる時期でもあり、雨に加え、日中の高い気温は人々の体力を奪っています。水、食料、医薬品、テントなどが不足しています。都市部よりも農村部の方が状況は厳しいようです。

＊地球の木が支援しているマンガルタール村の状況

現地パートナーNGO・SAGUNのカマルさんたちが現地を視察しました。カトマンズ市内から東南に約75キロのマンガルタール村では、家屋のほとんどが損傷し、人々は戸外で生活をしています。地面から上がってくる湿気が健康に害を及ぼしています。肺炎や下痢の症状を訴えている人も出てきています。雨に耐えるテントと医療が必要です。地球の木の支援で建てた高校の屋上の図書室も壊れてしまいました。

＊現地からの声

「マンガルタール村のほとんどの家が被災しています。とても厳しい状況です。これからどうなるのか？ 恐怖、恐怖の毎日です」

「まともな食料、水、保健衛生、政府の援助、すべてが不足しています。私たちの国が早くこの深い悲しみから立ち直っていくことを願っています」

＊緊急支援の内容

5月15日までにSAGUNのスタッフが数回現地を訪問し、マンガルタール村、カルパチョーク村の全戸と隣接する2村の90％の家にテント（防水シート）を配布することができました。また、医薬品を女性地域保健ボランティアに届けました。

今後は支援の入っていない地域への対応と、仮設住宅の建設などを実施していきます。

皆さまからはすでに温かいご寄付をいただいておりますが、引き続きご支援をよろしくお願いいたします。募金については、P.8をご覧ください。

なお地球の木は「かながわ復興支援ネットワーク」にも加入しています。

カマルさんからの手紙

震災前、カルパチョーク村の子どもとカマルさん

ネパールの被災者のために皆さんが手を尽くして支えてくださっていることに心から感謝いたします。

今回の地震では、ネパールの中部地方の12郡が甚大な被害を受けましたが、私たちの支援地カブレパランチョーク郡もそのひとつです。

ボランティアで運営している私たちNGO・SAGUNは、地球の木と共に2006年からすでに8年間カブレパランチョーク郡のマンガルタール村、カルパチョーク村およびその周辺の村々で活動をしてきました。これらの村には約4,000人の人が住んでいます。そのほとんどの村で今回90％の家屋が損傷を受け、居住不可能な状況になり、人々は戸外のテントで暮らしています。

地震の3日後にマンガルタール村を訪れた時、村人たちは、一番先に来て話を聞いてくれたのはSAGUNだったと言いました。郡庁から車で1時間ほどの場所にもかかわらず、行政の支援やいかなる団体の支援もなかったとのことです。テントも食料もなしに戸外で暮らしている、更に奥地の人びとの状況が想像できます。

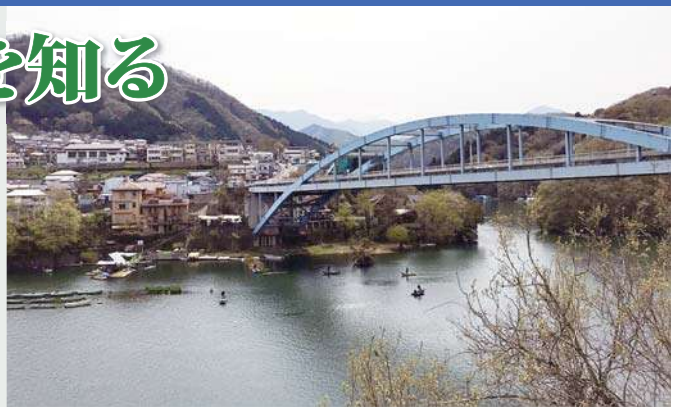
皆さんのご支援は、恐怖のどん底からネパールの人たちが抜け出る確かな助けとなります。皆さまにネパールの友人たちへのご支援を、SAGUNを代表してお願いする次第です。

2015年5月20日

ネパールSAGUN事務局長　カマル・フヤル

地球の木 国内スタディツアー2015

足もとにある豊かさを知る



地球の木は、設立以来「先進国」と呼ばれる国々が「途上国」に及ぼす様々な不利益について考え、お金による支援だけではこのような問題が解決しないこと、私たちの暮らし方を見直して、他から奪うことのない暮らしを実践することを提案してきました。

今年の地球の木国内スタディツアーは、4月12日「分かち合う暮らし」を目指して先進的な活動を展開している「トランジションタウン」を訪問しました。

■「トランジションタウン」って？

石油に依存した、現在の大量消費型社会システムから、持続可能な生き方にトランジット（移行、脱依存）していこうという、イギリス発の草の根市民活動です。この、人にも地球にも優しい、「あったか～い」暮らし方を実践している町が、新宿からJRで1時間の所にあります。「トランジション藤野」、芸術の町としても有名です。

■地域通貨「萬」（よろづ）

地域に循環型経済の仕組みをつくろう、と2010年「よろづ屋」をスタート。初め50人だった会員が、今では360人。連絡はメーリングリストを使い、会員は自分のできるモノ・コト（give you）、してもらいたいモノ・コト（give me）を投稿します。

例えば、留守にするのでペットの世話をしてほしいという人は、メーリングリストで呼びかけます。Aさんは、「赤ちゃんが生まれます」と発信。すると、ベビーベッド、ベビー服など必要なものがあっという間に揃いました。

地域通貨というと紙幣を使う所もありますが、藤野では通帳記入方式を取っています。お世話になった人は、通帳にマイナス〇萬、お世話をした人は、同額をプラス〇萬と記帳します。額は両者の話し合いで決めます。

「マイナスが溜まって、私は世話になるばっかりで…」と恐縮する会員もいるそうですが、「マイナスの多い人は、誰かから特技を引き出すのがうまい人」。プラスでもマイナスでも使うことに意義があるのだそうです。地域通貨が結ぶ助け合いの輪が地域に広がり、眠れる資源・才能の発掘にも一役買っています。

■藤野電力

3・11の時、藤野でも大規模な停電と計画停電があり、人々は不安に苛まれました。その時、一軒だけ灯りの点っている家がありました。ソーラーを利用していた整体院でした。大規模発電に完全に依存する社会のもろさを肌で感じた住民たちから藤野電力が生まれました。

旧牧郷小学校は藤野電力の拠点

無料の充電ステーション

藤野電力というと電力会社かと思いますが、電気を売る会社ではなく自分の使う電力を自分の手で作りたいと考える人や地域を後押しするグループです。

夏には廃校になった小学校で、100パーセント自然エネルギーを使った「ひかり祭り」を開催します。地域でソーラーパネルを使っている住民たち、ミュージシャンたちが結集した、3日間の光と音楽の祭典です。

藤野をツアーしていると、FREE CHARGEという看板があちこちにあり、携帯電話や電気自転車の充電がただでできます。

■森部

藤野は緑がたくさん残っている里山。「森部」は、「きらめ樹」という、皮剥ぎをして乾燥させた木を間伐する方法で森を守っています。女性や子どもにもできる「きらめ樹」が広まったら、日本中にある、暗い森に再び光を取り戻すことができるのでは…。

■成功の秘訣

トランジション藤野の活動が長続きし、多くの人の共感を得てきた背景には、「できる人ができる時にできることをする、身の丈でやる」といったキーワードがあります。3人寄って、月1回ミーティングをすれば、グループとして承認されるので、自発的なコミュニティが育まれ、それぞれが地域の課題に取り組みます。皆が違いを認め合い、他を否定しないという点も、コミュニティづくりに欠くことのできない視点、本当に学ぶことの多いツアーでした！

皆で飼う「地域チキン」

（国内スタディツアー実行委員　乳井京子）

from Laos

ラオス支援がめざすもの

（上）
米銀行用の米蔵を村人が協力して建てる

（左）
イラスト調カレンダーで森に関する法律を学ぶ

●ラオスプログラムの背景は・・・

地球の木はJVC（日本国際ボランティアセンター）を通して、ラオスの村人の多様な食料の十分な確保を目的として支援してきました。サワナケート県でのプログラムは今年7年目を迎えます。

国民の8割が農民というラオスの田舎の暮らしは、決して物にあふれた便利な暮らしではありませんが、村人たちは豊かな自然の恵みを知恵をしぼって利用し、コミュニティの助け合いの中で貧しいながらもゆったりと、のんびりと、そしてしたたかに暮らしてきました。

しかしラオス政府は、2020年までに最貧国から脱却しようと、経済発展を最重要課題とし外国からの投資を呼び込んでいます。飢餓もない、スラムもないのに最貧国に分類されるのは、国民の多くが「自給的な暮らし」では、お金が動かないためGDPの数値が上がらないのだそうです。

そんな中、外国企業が豊かな村の森を村人の合意を得ないまま取得し、（実際には、50年契約で土地を貸すというラオス政府が認めている形式ですが、）森を燃やし木を伐採してその跡地をゴムやユーカリなどのプランテーションにするという産業植林が急速に増えてきています。学校や病院を建ててあげるとか、プランテーションで仕事があるとか、甘い話に乗せられて森や土地を渡してしまうのですが、契約書も交わしていないため、反故にされても村人は泣き寝入りという現状です。

JVCは村人が不当な話に騙されないよう、きちんと権利を主張できるよう、まずは村人自身が自分たちで森を守るという意識を持てるように、森に関する法律や自然資源管理の重要性を人形劇にして上演したり、イラスト調のカレンダーを配布するなど、村人に意識啓発の活動を行っています。

さらに、豊富な食料庫であった森の減少は食料確保を難しくするため、JVCの持続可能な自然農業による食料生産向上の技術指導や、凶作時に備えた米銀行、貧困家庭支援の牛やヤギを貸し出す家畜銀行などの活動は、現実的に暮らしを守る手段として有効な支援となります。

●6年間の振り返りとこれから

ラオスの農村開発プログラムは、地道で息の長い支援です。社会主義の国で、村人たちが自分たちの力で自らの未来を選べるようになるにはまだ時間がかかるでしょう。

6年間の中で特に印象深かったのは、JVCラオスのフンパンさんの日本留学の支援をしたことでした。彼を通してラオスが一層近くなり、彼への応援はラオスの村への応援へと心情的にも繋がりました。そして今、彼を中心に若手のラオス人スタッフがどんどん育っています。

JVCのこのプロジェクトは今後も場所を変えて続いていきますが、地球の木ではこれからの3年間を終了に向けてのイメージも持ちながら活動していきたいと思います。

地球の木の支援は、お金を出す一方的な支援に終わることなく、日本の私たちの社会へのフィードバックにつなげることが役割です。ラオスプログラムから見えてきた課題をテーマにワークショップを考案中です。また、できれば会員の皆さまを対象にしたスタディツアーの計画もぜひ立てたいと思います。今後も応援よろしくお願いします。　（ラオスチーム　中野真理子）

from Cambodia

CWCC訪問 ―ある女の子の場合―

インタビューを受ける被害者女性

3月に、カンボジアの女性シェルター＊CWCCを訪れ、被害者の話を聞いたりシェルターの様子を（被害者やその家族の顔を映さずに雰囲気だけ伝えられるよう）撮影したりして来ました。

インタビューして一番つらかったのは、10歳のレイプ被害者の話でした。お母さんと一緒に来た可愛らしい女の子で、今の生活や好きな科目、スポーツについて聞いてみましたが、被害に遭った時はまだ5歳だったそうです。言葉にはできないほど心が痛みました。彼女の家族はとても貧しく両親共工場で働いています。事件も彼女が一人で家にいる時に近所の人に押し入られて起きました。

「カンボジアでは示談が多いと聞くけど、どうしてCWCCに来たの？」と聞くと、お母さんの話はこうです。「当初は私も夫も怒りを抑え切れずパニックになって、どうしたらいいか分からなかった。警察は信用できないけれど、どうしても犯人をつかまえて罰を与えて欲しかった。CWCCへは親戚から教えられて相談に行き、病院や専門家も紹介してもらいました。犯人は懲役10年となりました。もっと長く刑務所にいるべきだと思うが、娘にとって、悪い人はもう村にはいないということが大きな安心感になった」

インタビューではいろいろ考えさせられました。貧しさとは時にお金や洋服ではなく、「信頼できる社会制度」が重要であること。仕事があり、食べるものや学校があっても、信頼できる警察、法律がない社会では人々は常に不安を抱えて生きなければなりません。日本でも貧困が問題になっていますが、何かがあれば110番で警察官がかけつけてくれます。そしてそれは月給5,000円（非常に安い）で常に賄賂をとっている人々ではありません。

家庭内暴力やレイプの被害を受けた女性たちが、示談や泣き寝入りするのではなく、彼女と彼女のお母さんのように、「訴える」ことによって少しずつでもカンボジア社会を変えていけるよう、応援していきたいと思います。

（理事　古田麻利子）

＊CWCC(Cambodia Women's Crisis Center)：
カンボジア女性緊急救済センター

「アン村の自然染色」これから

2月末に、カンボジアを訪れました。この時期カンボジアは、乾季。この乾季に結婚式を挙げるカップルも多く、都会でも、農村でも実に多くの結婚式を見かけます。人口分布をみると25歳未満が人口の50%近く。この状況も「納得」と思ってしまいます。一方で、これは就労人口が多いことも意味し、この安価な労働力は外国からの投資を呼び、リーマンショックで一時は落ち込んだカンボジアの経済成長（GDP 成長率）は、2013年現在、7.5%と好調に伸びています。

地球の木が自然染の製品開発を進めるタケオ州アン村でも、生産者のヌンさんの家で次女の結婚式が執り行われていました。参列者の女性は皆、絣（かすり）のシルクのスカートをはいています。伝統的な絣の産地でもあるアン村では、織った中でも気に入ったものは自分の祭事用の衣装としてとっておくそうです。この日のヌンさんは素敵なブラウスと今風のヘアメイクでまるで別人のようでした。そして絣のスカートはというと… 一見キラキラときれいなのですが、ちょっと見慣れない感じでした。現地連絡員のディナ君が一目見て、「あれはベトナム製で機械織り。シルクではありません」。ヌンさんは私たちの注文の他に、シルクの絣も織っているのに、晴れの日のためにとっておく余裕がないのです。

自然染色の糸を手に取るヌンさん

結婚式の費用は新郎持ち

ヌンさんの生産状況について聞きました。この数年で自然染色もかなりバリエーションを持って生産できるようになりましたが、自然染色は化学染料よりもずっと手間がかかるそうです。今のカンボジアのテンポの速さとは、ちょっとずれているかもしれないと思いました。自然染色は環境に優しく、色合いも優しい感じなので、日本人には人気も高いのですが、その価値と魅力をどう引き出し、アピールし販売していくかは、地球の木側にとっても今後の課題です。アン村での自然染色のスカーフの生産は、今年度からプログラムから外れますが、フェアトレードのクラフト事業として継続していきます。

縫製工場の「通勤トラック」が村まで来て、若い人たちがどんどん、働きに出ています。今はまだ、シルクの絣の需要も多く、織物は村での重要な産業ですが、目まぐるしい速さで村も変わっていくのでしょう。タケオの人たちとつながりながら、カンボジアの素晴らしい織物をこれからも伝えていきたいと思います。

（クメールシルクチーム　筒井由紀子）

新年度に向けての国内活動

「たうんチーム」の活動は

地球の木は海外支援と国内活動を車の両輪としています。国内活動の一つとして「たうんチーム」は地域活動に重点をおいています。

「たうんチーム」の前身は、地球の木を各地域に分けブランチとして活動してきたのですが、地域により活動のばらつきが出てきました。そこで地域の垣根を取り払って元気な活動をしようと、新たに「たうんチーム」としてスタートしました。各行政や市民活動センターが行うフェスティバルに、地球の木をより多くの皆さんに広く知ってもらうために参加しています。

昨年度は、「かながわ湊フェスタ」「ひらつか市民活動センターまつり」「かまくら国際交流フェスティバル」等に参加。特に「かまくら国際交流フェスティバル」は会場が大仏さまのある高徳院なので、地域の皆さんだけでなく大仏を見に来る観光客にも地球の木をアピールしました。

今年度も多くの催しを計画しています。海外支援地の報告会を行うことを計画しています。会員の皆さんもぜひ参加してください。　（たうんチーム　松本陽子）

「出前講座チーム」のこれから

出前講座チームの活動は、依頼された学校や地域に出向きワークショップをすることです。毎年、ある程度決まった学校から依頼があり、実践を重ねてきました。

ゆとり教育が重視された当時は忙しいほど依頼がありました。その後、学校の授業内容の変化から依頼が減り、8人の出前講座チームのファシリテーターは各自が年に1～2回程度の活動になり、「出前講座チーム」はこのままでよいのだろうか…と悩むようになりました。

「もっと機会を増やしたい」と考え、学校だけでなく各区の地域振興課や地区センター、元気な高齢者や積極的な女性、好奇心や意欲旺盛な人たちにアピールし活動を広げようと思い、その結果、「湊フェスタ」への自主参加。また、DEARの「地球の食卓」をもとにした地球の木らしい新教材「未来の食卓」を完成させました。「未来の食卓」は「横浜国際フォーラム」で発表し、鎌倉女学院、平楽中学校で実施することになりました。

なお、昨年度特筆すべきことは、藤の木中学校からの依頼で、学校全体のイベントとして、生徒全員に「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを実施したことです。学年ごとに2グループずつ（1グループ約60人）で、一日かけての実施でしたが、今後はどこかで実際に100人でやってみたいと思います。　（出前講座チーム　山崎信子）

出前講座「マジカルバナナ」

多文化共生に向けての取り組み

神奈川県には16万人の外国籍県民が暮らしています。しかし、どのような人たちが、どのような経緯で日本に住み、どのように感じているかは知らない人が多いです。今、国家間の不協和音に共鳴するように、一般市民の間にも嫌韓・嫌中の空気が漂うようになってきました。また、後藤健二さん殺害のニュースにより、イスラム教会への嫌がらせも相次いでいます。

このような状況の中、外国に繋がる人々への理解を深めることが急務と考え、「多文化共生」を国内活動の重点項目のひとつにし、これまで繋がりのあった個人や団体の協力を得て、共にいくつかの事業を行っています。

昨年は、「かながわ『共に生きる』学習会」を2回開催。「映画『まとう』を観て皆で話そう」と「『南北コリアと日本のともだち展』―14年の交流から見えるもの」には、延べ60人以上の参加がありました。参加者からは、「『共に生きる』が当たり前の社会になるように、今、大人としてできることを考えたい」「若い世代の交流の必要性を強く感じ、民・民交流を重ねていくことこそが最も大切なことだと改めて実感した」などの感想がありました。

あーすフェスタかながわ2014

今年度も引き続き、誰もが参加しやすい形で「共に生きる」ことについて考える企画を作っていく計画です。

（理事長　丸谷士都子）

支援地報告

—5/30 地球の木総会—

気仙沼、そしてネパール

まず笑顔でスクリーンに現れたのはTree Seedの代表、小野寺さん。スカイプを使っての気仙沼からの参加です。仮設に住む人々への物販のサポート、イベントやおまつりの開催、また事務所をセミナースペースとして提供していることや、インターネット放送のことなどが報告されました。また新たに計画している子どもたちのスポーツ支援については、気仙沼から駆けつけてくれた前代表の高木さんが、自身がトレーナーとしてどう指導するかや、子どもが運動不足になる被災地の背景などを語ってくれました。

次に、ネパールの地震について丸谷理事長が最新の情報を報告。今日本で日本語を勉強しているリタ・タパさん（以前地球の木のパートナーだったSOARSのユースクラブ元会長）も登場し、「家族は無事でしたが、今は2階が住めなくなった家の1階に住んでいる」と心配そうに話していました。　（会報作成チーム　沼田由美子）

代々木公園で初のカンボジアフェスティバル

4月25日(土)26日(日)、日本・カンボジア友好条約締結60周年を記念し、カンボジアフェスティバルが開催された。新緑が美しいケヤキ並木の下、音楽あり、食べ物あり、カンボジアらしい工芸品を売る店ありで、なかなかの人出。ちょうど訪れた時、舞台で小さなオーケストラがさわやかに演奏していたが、これは、アジア各国で子どもたちにクラシック音楽の生演奏を届けている団体とのこと。地球の木もシルクのスカーフや蚊帳織りのバッグで出店、人気を集めていた。　（会報作成チーム 斎藤和子）

気仙沼支援報告

気仙沼だより その9

「よってけ工房」

気仙沼から三陸海岸を北上したところにある唐桑半島。「漁師が森に木を植える」ことで、きれいな海を守り、カキを養殖していることでも有名です。

この地域は東日本大震災で大きな津波の被害を受けました。「よってけ工房」は昨年の気仙沼ツアーで訪問した唐桑町立小原木中学校仮設住宅の中にあります。もとは広い家に住んでいたのに、家も畑も津波で失ってしまい、狭い仮設住宅で住むことを余儀なくされてしまったお母さんたち。交通手段もないので、気仙沼市内に働きに出たりすることもできません。そんな中、裁縫の好きなメンバーが集まって、全国の皆さんから寄せられたという布を使って、布バッグやエプロンスカートなどを作って販売する工房を作りました。とてもユニークな柄や色合わせで、手作り感いっぱいの素敵な手提げバッグやおしゃれで下半身の冷え防止にもピッタリのエプロンスカートなど、値段も700円とお手ごろで、気仙沼応援グッズとして大人気です。デポーやイベントなどで販売しています。　（事務局長　筒井由紀子）

作品を見せるメンバーたち

活動日誌　（3月～5月 抜粋）

3月

- 3日　出前講座「世界がもし100人の村だったら」（横浜市立藤の木中学校）
- 7日　デポー展示会（東戸塚）
- 11～12日　デポー展示会（のぼりと）
- 16～17日　デポー展示会（みたけ台）
- 17日　第7回理事会・プログラム評価会
- 20日　デポー展示会（らいふたうん）
- 24日　地球の木カフェ

4月

- 2～3日　デポー展示会（つつじが丘）
- 9～10日　デポー展示会（ちがさき）
- 12日　国内スタディツアー（「足もとにある豊かさを知る」トランジション藤野訪問）
- 15日　第8回理事会
- 23日　地球の木カフェ@湘南台
- 23日　監査
- 25日～26日　カンボジアフェスティバル出店
- 27日～28日　デポー展示会（相武台）
- 28日　第9回理事会

5月

- 9日　出前講座「未来の食卓」「ネパールわくわくワークショップ」（横浜市立平楽中学校）
- 12日　第10回理事会
- 16～17日　「あーすフェスタかながわ2015」出店
- 21～22日　デポー展示会（緑園）
- 30日　第16回地球の木総会

ネパール大地震被災者支援にご協力ください

■緊急支援の内容

第一次支援として、マンガルタール村を中心とした周辺地域に、テント、医薬品などを緊急支援しています。

・地球の木は6月末に現地調査を予定しています。
・現地の様子や支援については、順次ホームページやFacebookでお知らせしていきます。
地球の木ホームページ　http://e-tree.jp

シャクナゲはネパールの国花

■募金の方法

【郵便振替をご希望の方】
口座名義：特定非営利活動法人　地球の木
●ゆうちょ銀行(郵便局)
口座番号：00260－5－14129
※通信欄に「ネパール大地震」と明記ください。
【銀行振込をご希望の方】
口座名義：特定非営利活動法人　地球の木
●横浜銀行 新横浜支店
普通預金口座　口座番号:1399575
●みずほ銀行　横浜中央支店
普通預金口座　口座番号:1042023
※ネパール大地震への寄付であること、お名前を別途事務局までご連絡ください。

■クレジットカードでのご寄付はホームページより受け付けています。

※地球の木は認定NPO法人です。皆さまからのご寄付は、確定申告により寄付金控除の対象になります。

「もったいないを国際協力に！」にご協力ありがとうございます

3月の会報誌でお願いした「もったいないを国際協力に！」に約20名の皆さまから、書き損じはがき、切手などのご協力をいただきました。大切に使わせていただきます。毎年、3月発行の会報誌と一緒に入れる「もったいない」ちらし。今後とも、どうぞご協力のほど、よろしくお願いいたします。

6･7月のデポー展示会のお知らせ

6月17日　東戸塚デポー
6月24、25日　日限山デポー
7月15、16日　高津デポー

ラオス モン族の手刺繍ポーチ　カンボジアシルクのバッグ

会員･ボランティアを募集しています。

地球の木は、1980年代後半に起きたアフリカ飢餓への緊急支援をきっかけに設立されました。誰にでもできることとして、1ヵ月にランチ1食分500円を集め、支援活動が始まりました。現在、ラオス･カンボジア･ネパールの3ヵ国で困難な状況にある人たちの自立を助ける支援を行っています。地球の木では、活動を支えてくださるボランティア、また、イベントや事務作業等にご協力いただけるボランティアを募集しています。

事務局の新しい顔

●**高橋 伶奈**(たかはしれいな)

はじめまして！ 4月から、地球の木のスタッフとして働くことになりました、高橋伶奈です。以前から、アジアの国々の文化を通じて、その国の経済発展に寄与できないかと考えており、今回、カンボジアの伝統的な織物を通して、少しでも貢献していけたらと思い、クラフトチームに参加させていただくことになりました。皆さまと一緒に、地球の木の活動を通して、世界の人々との繋がりを作っていけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

●**下田 寛典**(しもだとものり)

5月より地球の木事務局にてお手伝いをさせていただいております、下田寛典です。2005年のパキスタン地震の際に、地球の木がJVCと共同で被災者支援を実施した際に、JVCの担当をしておりました。地球の木に来て早々にネパールでの大地震が発生し、その被害の大きさに私も胸を痛めていますが、地球の木の皆さまがすぐに事務所に集まってネパールを思いやる気持ちを表していらっしゃる様子を拝見し、こうした皆さまの想いを少しでも形にするお手伝いができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE

編集後記

ヒマラヤの国ネパールでの大地震。東日本大震災を経験した私たちは、言葉もありません。ネパールの人々の恐怖や悲しみに少しでも寄りそって支援していきたいと思います。　夏の空　神の住む国　声もなし　(k)